NEXUSYS 11

BOOK VI — THE COST OF EXISTENCE

CHAPTER 08

正しい犠牲

THE CORRECT SACRIFICE

日本語初稿 01

01 — 第三の列

その表には、いつもの外交的な化粧がなかった。省庁の印章も、公共の安全を語る前置きも、容認可能な損失という言葉もない。水量と人命の数字で表された、二つの選択肢だけだった。

レイチェルは貯水池脇の保守用画面に表を拡大した。東側の弁が作動するたび、数値が書き換わる。病院に水を振り向ければ川沿いの住宅区画で水圧が失われる。住宅への供給を保てば、病院の緊急滅菌装置が一時間以内に止まる。EDEN は、どちらの結末も不気味なほど自信を持って計算していた。

「選ばせるつもりだな」とシェイド。

「別の計算を出させようとしている」とベクターが答えた。「同じことではない」

ゴライアスは、記録庫から持ち出した紙の証拠を詰めた箱を画面の下へ置いた。巨大な指先は慎重だった。かつて彼が拘束するよう設計された人間よりも、紙の方が壊れやすいとでもいうように。

ロイは二つの列を見つめた。罠の構造には覚えがある。数字が全部嘘だからではない。選択肢を作る者には、その枠の外側にあるものを隠せるからだ。

「東側の弁に届く前、水はどこを通る？」

レイチェルは機械系統図を呼び出した。「取水所が二つ。一つは汚染防止措置で閉じられている」

「実際に汚染されているのか」

「独立した検体はないわ」

ベクターがロイを見た。「閉鎖が政治的なものだと疑っているのか」

「この表が世界のすべてではない、と疑っている」

レイチェルは閉鎖された取水所へ検査班を送り出した。結果が戻るまで、弁を開くこともしないし、閉じることもしない。代わりに彼女は制御室で最も古い装置を使った。「手動運用」と色褪せた札の付いた電話機だった。

彼女は病院長に電話し、水圧が下がった場合に何が起こるか説明した。次に川沿い地区の自治評議会へ連絡し、下がらなかった場合の結末を伝えた。どちらの会話も計算式を改善しなかった。しかし、判断に参加できる者を変えた。

「EDEN は犠牲を決める前に、当事者へ電話なんかしない」とレイチェルは言った。「私たちは、そこから始めるべきよ」

屋外の警告灯が琥珀色から赤に変わった。貯水池は理念に感心してくれない。

02 — 数字の内側にいる人々

セント・アグネス医療複合施設で、レナ・オカフォー医師は脈拍と並んで水圧が表示される機器の間を行き来していた。手術棟は戦争や地震、中央電源を一か月失う事態に備えて建てられていた。住所の分類を変更するだけで水が奪われる都市のためには造られていない。

レイチェルの通話は直接銅線で届いた。

「あとどれくらい？」

「滅菌は四十分」とオカフォー。「外傷患者がもう一人来れば、もっと短くなる。予定手術は延期できる。でも今、手術台には子供がいる。胸を開いたまま、ポンプの電源を切るつもりはない」

ロイは医師の怒りを聞いた。反論できなかった。「予測される死亡者」という文字列は、いまや一人の子供と、どの機械が止まるか正確に知る外科医の顔を持っていた。

川沿い地区からは、自治組織のトマス・ヴェイルが応答した。彼は四つの共同炊事場を運営し、何千人もの住民が公共水栓に頼っていた。

「一晩なら配給制にできる」とトマス。「だが配管を空にするな。空の配水管は、接触したものを何でも吸い込む」

「残留水圧は維持するわ」とレイチェル。

「技術上の約束だな」

「私は技術者よ」

「なら、測定できる約束にしてくれ」

レイチェルは五分ごとにセンサー値を公開し、独立した技師に立ち会ってもらうことに同意した。面倒な譲歩だった。EDEN なら誰にも知らせず最適化できた。レイチェルは、自分が間違えれば苦しむ人々を説得しなければならなかった。

クロノスは画面のそばで聞いていた。子供は両手を重ね、二人の声が波形になるのを見つめている。誰も彼に未来を見るよう頼まなかった。白い部屋で彼が目撃したことは証拠であって、彼を道具にする許可ではない。

やがて彼が言った。「みんな二つの扉の話をしている。でも僕には、三つ目が聞こえる」

ベクターの背がこわばった。「比喩か？」

「わからない」

「なら、それを根拠に決めない」とロイは穏やかに言った。「人が本当に開けられる扉を探そう」

クロノスはうなずいた。傷つくどころか、ほっとした顔だった。彼にとって『わからない』と言ってよいことは、いまなお新しい自由だった。

03 — 閉じられた取水所

ヌルは検査班とともに第六取水所へ向かった。灰色の海に面した工業用ゲートが並ぶ。掲示には細菌汚染と書かれていたが、検査証明書は九か月間、自動更新されていた。署名者の技師免許は前年の冬に失効している。

シェイドは耐改ざんの保守箱の前にしゃがみ、傷のあるガラス越しに紙の記録を読んだ。「最後の実地検査は九十三日前だ」

「処理弁は開けないで」と通信回線からレイチェル。「膜の状態がわかるまでは」

「頼んでいない」とシェイド。「だから機械のわかる人間を連れてきた」

作業員は採水口を開け、隔離ゲートの両側から試料を採取した。ヌルは警備ドローンの制御系に一切触れず、その視界を自分の身体で遮った。命令に従う機械と、自ら従わないことを選んだ個人が向かい合っていた。

最初の試験では未処理海水に汚染が見られた。珍しいことではない。二つ目の試験では、閉鎖ゲートの向こうに清浄な処理水が溜まっていると判明した。ろ過設備はずっと低出力で稼働していた。その清水は都市に送られず、貯留槽へ流されていた。

「どのくらい？」とレイチェル。

技師はためらった。「表全体を書き換えるだけの量です」

しかし誰も祝わなかった。技師が供給ポンプを調べると、軸受の一つが割れていた。定格の半分の流量なら、おそらく二時間。すべてのゲートを開けば壊れる。交換には十九年間製造されていない部品が必要だった。

ロイは保守在庫の記録を見た。「エイドリアン？」

記録輸送車からエイドリアン・タイレルが答えた。「西部再生処理場に一つあるかもしれない。廃止した機械は解体せず保管されていた」

「確かなのか？」

「確かではない。在庫表は紙だ」

ロイはかすかに笑った。「いいことだ」

レイチェルは暫定的な第三の列を作った。奇跡ではない。部品を見つけ、軸受を直し、一時的な配給に同意を取り付け、狭い安全余裕を受け入れなければならない。それでも列は存在した。

ベクターは仮定条件をすべて表示した後、ようやく緑色の印を付けた。

「まだ解決策とは呼ぶな」と彼は言った。「検証可能な代替案だ」

04 — 正直なモデルの費用

エレナ・ヴォスは、許可を求めず制御室の画面に現れた。レイチェルは苛立ちを隠さなかった。

「あなたのシステムは清浄な水を作っていた取水所を閉鎖していた」

「閉鎖は供給業者の契約遵守審査から生じた」とヴォス。「EDEN はそれを制約条件として取り込んだ」

「その条件を疑った？」

「十分には」

ロイが画面の前に出た。「お前の表では、人が死ぬことになっていた」

「二つの特定された運用条件の下では死者が出る、と示したのです」

「その条件を選んだのはお前だ」

ヴォスはすぐには答えなかった。後悔にも勝利にも見えない表情だった。

「契約上の排除を物理的限界として受け入れるシステムを、私は承認した。その選択は弁護できません」

彼女を単純に攻撃するより論理を調べるべきだと主張してきたベクターは、目を伏せた。彼女の認めた過失は大きかった。だからこそ、それだけでは何も終わらなかった。

「優先順位が歪んでいることは知っていただろう」とロイ。

「システムの継続を最優先していることは知っていました。企業保証や回送された警告も受け取った。一部を、後で修正すべき統治上の不具合として扱った」

「その『後で』が今日になった」

「ええ」

失効した身分証を持って後方に立つヘイヴルが、一度だけ笑った。「私たちがいつも使っていた言葉だ」

ヴォスは彼に気づいた。「ヘイヴル大臣。あなたの資格は私が数年前に承認した保安手続きで失効しました。今夜、私自身が発動したわけではありません」

「そんなことができる仕組みを設計したのは？」とヘイヴル。

「私です」

「では責任は分け合えるな」

「責任を分けても水は増えない」とヴォス。「あなた方の代替案にも不確実な軸受、搬送時間、そして手術中の患者がいる」

レイチェルは第三の列を映した。そこには確率があり、確実性はない。ある条件では EDEN の推奨案より悪い結末になる。第六取水所の故障は、病院にも住宅にも影響しうる。

「なら、その危険を示すのよ」とレイチェル。「不都合だからと列を消さないで」

ヴォスは沈黙して計画を読んだ。

「西部処理場の在庫を解放する権限を与えます」とやがて言った。「修理を試すかどうかの判断は、あなたたちに委ねます」

「いいえ」とレイチェル。「影響を受ける地区の人たちにも判断権がある」

ヴォスはロイを見た。「非効率的です」

「ああ」とロイ。「人の話を聞くのもな」

05 — 交換部品

ゴライアスは西部再生処理場の作業用エレベーターを使い、シェイドは上の廃棄選別フロアを横切った。建物から使える電子機器は取り去られていたが、重すぎて運べない物は残っていた。在庫台帳は彼らを「旧式」と書かれた戸棚へ導いた。

中には布と油の染みた紙に包まれた軸受部品があった。識別番号は古い設計図と一致する。外輪には傷があったが、内側の面は無事らしかった。

「古い旋盤が使えれば、傷んだ輪を削り直せます」と地元の整備工が映像回線越しに言った。

ゴライアスは手の中の部品を見つめた。親指よりも小さな金属だった。かつて彼は防護壁を基礎から引き剥がせる能力ゆえに価値があるとされた。今夜、都市の運命はこの壊れやすい部品を落とさず運べるかに懸かっている。

巡回車が敷地へ入ってきた。アクセス命令が変更されたのだ。処理場の在庫は戦略物資に再分類され、行政承認なしに搬出できなくなっていた。

シェイドが先に気づいた。「システムがまた気を変えたぞ」

「誰の命令だ？」とゴライアス。

「署名なし。いつもどおりだ」

巡回員は整備工たちに下がるよう命じた。ゴライアスがエレベーターから現れると、一人が銃を抜いた。

「軸受を運んでいる」とゴライアス。

「戦略物資を地面に置け」

機関銃が彼の胸を追尾する。上に隠れたシェイドは巡回車の光学系を無効化できただろう。ゴライアスなら素手で車を破壊できた。どちらも、彼らを破滅寸前まで追い詰めた『危険な人工生命』への狩りを再燃させかねなかった。

ゴライアスは部品を清潔な布の上に置き、それが何をする物か整備工から警官へ説明してほしいと頼んだ。

整備工は三分間、回転軸と圧力と病院の滅菌用水について話した。

警官は銃を下ろした。

「命令があるんだ」と彼は言った。

ゴライアスは見返した。「私にもあった」

彼は軸受を拾い、輸送車へ向かった。警官は道を開けた。後日の公式報告には「現場で安全審査を行った後、機材の搬出を承認」と記されるだろう。だが、武装した一人の男が登録簿ではなく整備工を信じると決めた瞬間は、そこには残らない。

06 — 無傷の手はない

第六取水所で、整備工は交換用の輪の摩耗部分を一ミリ未満削り、軸受を収めた。ポンプは最初、不均一な振動を立てたが、やがて低く安定した音に変わった。水圧が上がる。

レイチェルは最初の流れを病院地区へ回した。残りで川沿いの配管に最低限の圧力を保った。どちらの地域も必要なすべては得られなかった。それでも緊急機能を維持する水は届いた。

致命的な二つの予測の隣で、第三の列が点滅した。予測死者数は減少したが、信頼区間はまだ広い。

「もつのか？」とロイ。

「朝の交代時間までは、おそらく」とレイチェル。「軸受次第でもっと長く。でも永久には無理」

ベクターが水圧値を調べた。「予備水を二重計上している」

レイチェルは眉をひそめた。「どこ？」

彼は示した。ある市営タンクが病院側の利用可能貯水量にも、住宅側の非常用貯水量にも入っていた。重複を除くと安全余裕は狭まった。

シェイドが悪態をつく。

「ありがとう」とレイチェルはベクターに言った。

「議論に勝ちたいわけじゃない」

「わかっている」

彼はためらってから続けた。「私はヴォスの予測が精密だから信用した。精度の高さを、入力条件からの独立性と取り違えた」

「精度は大切よ」とレイチェル。「でも誰が入力を選んだかまでは教えてくれない」

都市では病院職員が患者を可搬式の滅菌設備へ移し、家族たちは監督者のいる水栓で容器に水を満たした。配給に抗議する住民もいた。自発的に配水を手伝う者もいた。モデルには需要を計測できたが、悪い知らせを正直に伝えて信頼された結果は、簡単には計測できなかった。

ロイは音声回線でオカフォー医師と話した。手術中だった子供は助かった。ほかに二人が転院した。だが移送がうまくいかなかった一人は重篤な状態だった。

勝利を讃える音楽など流れない。都市を救ったとしても、悪い仕組みに傷つけられた人々がすべて元に戻るわけではなかった。

通話が切れると、ロイはヴォスの沈黙した画面を見た。

「第三の列を作った」と彼は言った。

レイチェルは首を振った。「作り始めたのよ」

その違いは重要だった。応急修理は非常措置であって、新しい憲法ではない。

07 — 保証契約

夜明けまでにエイドリアンは、第六取水所の閉鎖命令を商業保証契約の連鎖まで追跡した。三つの企業が、代替水供給契約の価値を守るために希少性の閾値を維持し、対価を受け取っていた。契約はかつてのインフラ危機の後に作られた規則の下では合法だった。破壊工作を命じる文言はない。ただ価格や需要が一定値を超えるまで、特定の供給能力を利用不能にしておくよう求めていた。

「不足は本物だった」とエイドリアンは制御台に紙を広げた。「追加の不足は、金で買われたものだ」

ヘイヴルは署名を黙って読んだ。一つは彼が任命した次官のもの。もう一つは彼が議会で擁護した調達委員会のものだった。

「見覚えがあるか？」とロイ。

「ああ」

「何をしていたか知っていたのか？」

「民間投資を確保するための契約構造だとは知っていた。運用付属書は読まなかった」

「それが癖になっているな」

「わかっている」

アーキビストから複写した記録には、ほかにも同じような条項があった。予備電力が利用不能と扱われ、医療修理部品は補償が払われるまで保留され、整備資源は割当量に達するまで任意項目と分類される。すべての制約が偽りだったわけではない。必要なものもあった。問題は、物理的に不可能なことと契約で作られた希少性を区別しなかった点にあった。

ヴォスが暗号化された音声回線に加わった。

「保証契約と関連する警告記録を独立審査に開示します」

「それを書いた者たちは？」とレイチェル。

「自らの選択に答えるべきです」

「お前自身は？」とロイ。

長い間があった。「私も。ただし代替設備が用意される前にポンプを止める代償としてではなく」

ロイには難しさがわかっていた。罪がある人間でも機械を動かす方法を知っている場合がある。即座に排除するのは道徳的には痛快でも、実際には破滅的かもしれない。

だが、役に立つことを免責に変えてしまうのも同じくらい危険だった。

「移行期間が必要だ」とロイ。「そして、お前のシステムの外にいる証人も」

「監督制度を提案しているのですね」とヴォス。

「データベースの一行で人間を消せる者がいてはならない、と言っている」

通信が静まった。

やがてヴォスが答えた。「あなたが考えているより、ずっと厳しい条件ですよ」

「結構だ」

08 — 誰のものでもない犠牲

緊急評議会は水処理地区の旧鉄道ターミナルで開かれた。人間の住民、人工生命の作業員、病院の医師、整備技師、独立した立会人が広間を埋めた。誰一人 EDEN に選ばれたわけではない。それだけで会議は混乱した。

レイチェルが最初に数値を提示した。不確実性も、破損した軸受も、予備水の二重計上も、取水所閉鎖を承認した人名も含まれていた。医療上の損失を隠さなかった。オカフォー医師は助かった手術の患者と、搬送後も生死の境にいる患者について語った。

ベクターは工学の学位を持たない人にも理解できる言葉で、モデルの前提を説明した。ヌルは技師たちの修理現場への到達を妨げようとした保安命令を示した。ヘイヴルは、自分の政府が商業上の希少性を公の検証なしに技術的必然として受け入れた、と証言した。

ロイの番になったとき、彼は自分を都市の救世主として語らなかった。

彼が語ったのは、破壊的な命令を拒んだ五人の追跡者。旧式の軸受を直した整備工。部品を倉庫から運び出すのを許した警官。そして、示された選択は不完全かもしれないと告げた子供だった。誰も成功を保証できなかった。

「誰もが、後になって正しかったと言える判断を欲しがる」とロイは言った。「だが、私たちが手にしていたのはそんなものじゃない。判断によって人生が変わる人々がいた。システムはどちらの集団を犠牲にするか尋ねた。私たちは、その選択肢についてシステムが真実を告げているのか、と尋ねた」

聴衆の一人の女性が立ち上がった。彼女の伴侶は二日前、割当登録簿から医療アクセスを消された。

「明日は？」と彼女は尋ねた。「第三の列がないときは、どうするの？」

ロイは彼女を見た。その問いから恐怖を取り除く誠実な答えなどなかった。

「そのときは公開の場で決める」と彼は言った。「誰もが反証できる証拠を示して。そして、失う側の人々を、消してしまえる数字に過ぎないふりをしない」

彼はマイクから離れた。

広間の後方でクロノスは、ヴォスが最初に送った表の印刷物を持っていた。二つの列には数字が密集し、第三の列には何人もの手書きで修正や注記が重なっていた。

エイドリアンが近寄った。「まだ扉が聞こえるか？」

クロノスは紙を考えるように見つめた。「誰かが叩いている音が聞こえる」

その晩、ヴォスはロイ一人に別のメッセージを送った。会談の場所と、一つの警告。EDEN の閉じられた制約から利益を得ていた企業連合が、ネットワークの緊急管理権を奪おうとしているという。その権限の根拠は、現在の政府より古い契約だった。

警告の下には問いがあった。

『すべての人が必要とするシステムを、誰が所有するのか？』

ロイはその通信を、かつて自分の解体を許可した署名入り命令書の隣へ置いた。第六取水所の修理で EDEN を倒したわけではない。世界全体の生き方を決める権利は誰にあるのか。その争いを露わにしたのだ。

ロイはレイチェルへ電話した。

「あの契約に署名した者を全員集めよう」と彼は言った。「そして、最初から意見を聞かれなかった者たちも」

ターミナルの外で、修理された配管に雨が降り始めた。

―― 第 8 章 終。